

## 清沢満之(きよざわまんじ)のいふ

齊藤 征雄

清沢満之は、明治時代の宗教家である。

幕末尾張藩の下級武士の家に生まれ、勉強させてもらえるならという理由で真宗大谷派の僧侶となった。そして東京大学の哲学科を首席で卒業した俊才である。

卒業後は、常時黒衣の僧侶姿で禁欲自戒の生活をして、哲学的思弁で宗教に肉迫しようとしたと言われる。その後宗門の改革に熱意を傾けるとともに、東京本郷に『浩浩洞』という私塾を開いて多くの門下を輩出した。同時に巢鴨に開校した真宗大学(その後京都に移されて大谷大学となる)の学監にも就任した。

しかし、過度の禁欲生活と修業により三三歳で結核を発病、四一歳で歿したのであった。

浄土真宗は、阿弥陀如来への絶対他力信仰である。如来を信じて「南無阿弥陀仏」を唱え、その慈悲に身をゆだねる。その単純な教理は、仏教とは相いれない一神教をすら想起させる。特に満之のような最高の知識人にとって、自己の無力に気付いて絶対的な力にすべてを頼ることは簡単ではなかっただろう。

満之は、死ぬ一週間前に書いた『我信念』の中で「自力の無功なることを信じるには、私の智慧や思案の有り丈を尽くして其頭の挙げようのない様になること。これが甚だ骨の折れた仕事でありました」と述べ、最後に「私は何が善だやら何が悪だやら、何が真理だやら何が非真理だやら、何が幸福だやら何が不幸だやら、ナンニモワカラナイ」存在であることに気付くのである。

そして、無能である自身の根本は如来を信じること、如来を信じる以外には生きることも死んでいくこともできないとの思いに到達する。

死の病に取りつかれた満之にとって、迫りくる死をどのように受け入れるかは切実な問題だったのである。

ふとしたきっかけで清沢満之を少し読んでみたが、彼の思想、人物像の全体を理解することは到底無理である。ただ、宗教を通して人間がこうした透き通った透明な心に至ることは、純粹に心に染み入る。信じれば、自己のありのままを自覚して受け入れることができるということなのであろうか。